

育児環境と子どもの心身状態との相互性に関する研究

愛育相談所	川井 尚・庄司 順一 千賀 悠子・湯川 礼子 加藤 博仁・山本 清恵 稗田 涼子 神田 久男 (立教大学) 吉川 政夫 (東海大学)
母子保健研究部	松浦 賢長
保健指導部	中野 恵美子
嘱託研究員	恒次 欽也 (愛知教育大学)

<要 約>

子どもの心身の健康は、育児環境のいかなる要因と相互性を有するのかを明らかにし、乳幼児健診での保健指導の子どもの相談の実際に寄与することを目的に本研究は行われた。研究方法はアンケート法をとり、目的に合致した調査項目を選定作成した。

調査対象は4・5・6歳児860名である。データの整理は単純集計とその結果に基づいて本研究目的である子どもの心身状態と相互関係をもつ要因を見いだすために χ^2 検定によるクロス集計を行った。その知見を要約すると、子どもの心身状態と相互の関係をもつ要因は、

1) 母親に関する5つの要因

2) 父親に関する2つの要因

3) 子ども自身に関する2つの要因が見いだされた。そして特に、母親の心身状態の要因が子どもの心身状態と最も強い相互関係をもっていた。しかもこの要因自体が父親の心身状態をはじめ多くの要因と有意な関連を有し、従って、母親への支援、援助が必要であり、そのためのポイントを指摘した。

次に父親に関しては、父親の心身状態の要因が母親のそれに次いで子どもの状態と強い相互の関係を有し、父親もまた母親と同様、子どもの心身の健康にとって重要な機能を果たしていることを示し、その要因の相互関連を分析考察を加えた。

この母親と父親に関する要因を中心に、子どもの心身の健康は育児環境を構成するこれらの要因と子どもとの相互作用によって成り立っていることを示した。

<見出し語> 育児環境、子どもの心身状態、母親・父親の心身状態

A Study of the Effects of Child-Rearing Environment on the Children's Psycho-Somatic Functioning.

This study concerned the relation between children's mental and physical health, and factors in the child-rearing environment. The purpose of the research was to contribute to the practice of child health guidance in the well baby clinic, and consultation in psychological clinics.

A questionnaire was distributed to the parents of 806 children aged 4- to 6-years of age. The results showed that children's mental and physical states were related to (1) 5 maternal factors, (2) 2 paternal factors, and (3) 2 child factors. Among the factors, mothers' health state had the most strong relation to the children's state. The mothers' state was also significantly related to many other factors, including the fathers' health state. Thus support and help for the mother appear to be most important, and we discuss several issues concerning such support.

Finally, it is suggested that children's mental and physical health are a product of the interaction between the child and factors constituting the child-rearing environment.

KEY WORDS: Child-Rearing Environment, Psycho-Somatic Status of Children, Health Status of Parents

<研究目的>

子どもの心身の健康は、子どもと環境との相互作用により成り立ち、更にその増進がはかられるという仮説が本研究の出発点である。従来、この領域では母子関係が中心課題であり、子どもの発達や健康問題は、母と子の、特に母親の子どものとの関係のありようが、養育態度をはじめとして、取り上げられ、検討されてきた。しかし、母子関係が、子どもの健康について中心的な役割を果たしているとしても、母親ないし、その母子の関係性に、父親をはじめとして、育児環境を構成している、各領域、要因が影響を与え、あるいは相互性をもっていることが考えられる。

このような相互性の観点から、図1に示すように、Belsky¹⁾の親行動の決定要因の考えもでてきている。

そこで、本研究では、子どもの心身の健康が育児環境のどのような要因と相互の関連を有するのを見だし、乳幼児健診等小児保健活動や子どもの相談の実際に寄与することを目的として行われた。

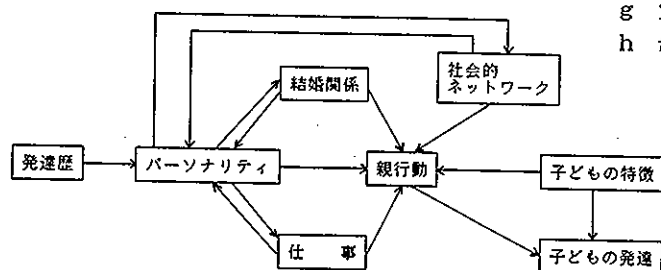


図1 親行動の決定 (Belsky, 1984)

1 研究方法

1 調査項目の作成： 本研究目的を果たすために、次に述べる考え方と資料に基づいて調査項目を選定し作成した。

①育児環境を構成する領域の設定： 育児環境を図2に示すように、子ども自身の要因を中心に、家庭の領域として母親の要因、父親の要因、そして家庭の周辺領域として、母親や子どもの友人関係、集団生活、習い事を配し、これをもって子どもが育成される環境として、操作的に設定した。

②調査項目の選定： 設定した領域の各要因について妥当な項目を選定するために、以下の調査資料を根拠とした。作成した調査項目は付表1の単純集計表に示した。

- a 乳児期の母子関係と心の健康—全国調査から—²⁾
- b 昭和55年幼児健康度調査³⁾
- c 平成2年幼児健康度調査⁴⁾
- d 三歳児健診における心理社会的チェック指標の策定に関する研究⁵⁾
- e 幼児期後半(4・5・6歳児)の健診の意義に関する心理学的研究⁶⁾
- f 育児における父親の役割に関する研究、厚生省心身障害研究⁷⁾
- g 気質研究(気質質問紙)⁸⁾
- h 母性、父性行動の研究'(SCT法による)⁹⁾

なお、本研究対象を幼児期後半、4・5・6歳とした理由の第一は、育児環境との相互作用の効果の持続性がこの時期になればあるであろうこと、第二に現在乳幼児健診が3歳までであり、幼児期後半の健診の必要性が提示され、その実施の際に役立つ知見を得ることにある。

2 調査対象： 対象は4歳児(104名)、5歳児(405名)、6歳児(295名)で

あり、保育所(322名)、幼稚園(482名)の在園児である。そして、調査地域は、東京都区内、川崎市、浦安市、豊橋市の4地域である。

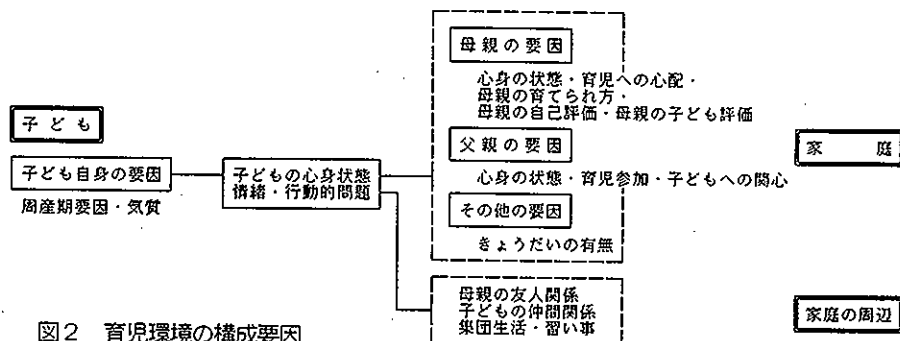


図2 育児環境の構成要因

3 調査方法： 保育所、幼稚園を通して母親に調査票を配布し回収した。回収率は 1,033 配布し、78.0%であった。

4 整理方法： 得られたデータについて、調査項目の全体的傾向を把握するために単純集計を行い、次に本研究の目的である育児環境を構成する各要因の相互関係を検討するために、 χ^2 検定によるクロス集計を行った。

<研究結果>

得られたデータについて、ここでは研究目的に従ってⅠ単純集計、Ⅱ子どもの心身状態と相互関係を有する要因に分けて述べる。

1 単純集計にみる子どもとその育児環境

付表1-1～1-21にすべての調査項目の実数と比率を示した。

1 子どもの心身状態

母親からみて疲れている子どもが15.4%（あてはまる、ややあてはまる）おり、比較するデータがないので評価はむずかしいが、注目したい比率である。後述する習い事をしているものは、全体の30.6%あり、それも一人で一つ以上の習い事をしている場合もあり、この影響もあるかもしれない。

友達と上手に遊べないものは13.3%いて、社会性の発達に注意を払うべきであろう。子どもと気持ちが通じ合わないとする母親が 8.7%おり、母子関係の機能が働いているかどうかという観点からも注目される。こころの状態が良好といえないもの 7.1%、からだでは 6.6%みられる。その理由は本調査では分からないが、要注意の子どもが数%はいることに留意したい。しかし、活発で、いきいきとし、楽しそうな、子どもらしい健康さを示す比率も90%をこえていることも、おさえておきたい。今後この比率を下げないことが、ポジティブヘルスの活動であろう。

2 乳児期の特徴

あまり眠らない方だったが15.7%、よく泣き、しかもなだめにくかったものは10.4%、飲みのわるさ10.6%、とても手がかり大変だったが14.8%で、いわば育てにくい乳児が10から10数%いるようである。これらの特徴は、母子の相互作用にネガティブな影響を与えることが想定され、保健指導等で適切な対応、援助を行いたいものである。

人見知り、後追いは、母子関係の成立とその機能を示すものであるが、強すぎるものは（人見知り16.4%、後追い18.7%）、不安をめぐっての母子関係の安全性の点で問題がある。

3 妊娠・周産期

妊娠に気づいた時、うれしいけれど不安だった人が、33.1%みられるが、これは通常の反応である⁹⁾。とても不安だった人が 5.3%いることに留意したい。

4 子どもの気になる行動

指しゃぶりの11.3%は、昭和55年⁹⁾及び平成2年幼児健康度調査⁴⁾の値と同率である。指しゃぶりのみであれば、特に問題にすることはないと考えられるが、ひどくこわがるとか、いきいきとしていない等と重なってくると、注意すべきであろう。爪かみ 8.7%、目をバチバチするチック 1.6%は、平成2年調査よりも比率（6.1%、0.8%）が高く、また昭和55年（5.1%、0.8%）と比較しても、比率が上昇しているようである。子どもたちにとって不安、緊張といった状況が増大しているのであろうか。

幼稚園、保育所にいきたがらないものは、2.1%あり、平成2年5・6歳児値が 0.4%であるのに対し比率が高い。

ひどくこわがるものは 4.3%、平成2年値 0.7%、家の人以外と話さないは 1.0%に対し、平成2年値 0.2%である。平成2年値は、全国調査であり、本研究対象が都市部を主としていることが関係しているかもしれない。いずれにしても、これらの行動特徴は、子どもの心の危機信号であることが多く、援助を必要としていることが予想される。

5 母親、父親の心身状態

①母親について： 健康であるとする人が90.8%、からだ快調85.6%、こころ快調は82.4%であり、多くの母親は全体的に評価すれば、心身ともに健康であるといえよう。しかし、疲れている47.6%、いらいら38.6%、ゆとりがない42.2%、家事等におわれている55.3%と、まさにこころのゆとり、余裕を感じない母親の生活状態を示している。また、育児を楽しみと思えない母親も28.8%いる。高知県での1982年と1991年の調査¹⁰⁾では、その10年間に育児を楽しみとする母親が82%から38%に減少しており、なぜ楽しみと思えないのか、どうすれば楽しく育児ができるのかの検討が必要であろう。

からだの不調13.8%、こころの不調も16.7%あり、乳幼児健診をはじめとする小児保健活動において母親への支援、援助は重要な仕事となる。

②父親について： このデータは母親からみた夫の心身状態に関する評価なので、バイアスがかかっている。このことを考慮しながら数値をみていきたい。

母親からみて、夫が健康であると評価するものは86.0%、からだ快調80.8%、こころ快調81.3%で、母親のそ

れよりも比率が低い。疲れている55.6%は、母親より高く、いらいらは17.5%と、母親より顕著に低率である。ゆとりがない28.2%、仕事に追われているのは53.1%である。母親と比較すると、項目により多少の差はあるが、ゆとりのない状況は同様であろう。

5 父親の育児、家事参加

子どもと、まあまあを含めて積極的に相手をする父親は76.1%、消極的は4.5%である。一方、家事への積極性は41%で、父親は、家事よりも子どもの育児の方が参加しやすい傾向にある。

このことは、父親の育児、家事参加への母親の満足度にも反映されて、育児への不満度が29.4%に対し、家事については42.5%が満足していない。ただし、育児に関心がない父親が16.8%いることは、注意しておきたい。そして、父親が家事、育児にもっと参加してほしいとする母親は49.4%みられている。

6 夫婦関係、家庭

夫婦間で気持ちが通じあっているとする母親が71.8%である。通じあっていないのは4.3%と低率であるが、どちらともいえないの回答が23.9%あることがまさに何ともいえない。

普段の家の中での決定力が、母親にあるとするものが35.6%であって、この比率の意味づけはむずかしい。決定の事がらにもよるであろうし、経年的な変化をみることも必要であろう。家族との会話が少ない14.7%、家族としてのまとまりが少ない11.3%は、いずれも漠然とした、あるいは雰囲気のようなものであるだけに、かえって影響の浸透力は強いようにも考えられる。

7 母親の育てられ方、友人関係、自己評価及び子どもへの評価

母親自身の育てられ方に満足しているものは56.8%、不満18.5%、そして何ともいえないものが24.7%であった。この数値の評価はしがたいが、何ともいえないが4分の1あることに意味がありそうである。そして育てられ方は、やさしく31.4%、きびしく35.8%、放任26.9%とほぼ均等であり、このこと自体は、特別なものではなくさそうである。

親友がいないもの11.7%、困った時相談できる友人がいない人が8.9%であった。夫とも自分の親とも相談や話し合いができないときが問題であろう。

自己評価は、他の人の評価やその人の対人関係のもち方に大きな影響を与えるものである。自分自身の全体的な状態や状況への評価で、まあまあを含めて76.5%の人が満足している。やや不満18.7%、不満4.7%と約25%の母親が不満であり、その内容を知りたいところであ

る。母親の子どもへの評価は、満足26.6%、まあまあが65.8%と、計92.4%と極めて高率であることは、子どもにとって有用な値を示したといえよう。それだけにやや不満7.2%、不満0.4%は要注意であろう。

8 子どもの友達、習い事

仲良しの友達は、94.9%の子どもにあって、5.1%がいない。前述の友達と上手に遊べない13.3%を考慮して、子どもの対人関係-社会性-の発達をどう援助したらよいのか課題である。次に習い事からみた生活の状態を平成2年幼児健康度調査の5、6歳児の値を比較しながら述べることにしたい。今の子どもたちは、幼児期からいかに多忙であるかが示されている。

お勉強のための塾(入園、入学の準備、英会話など)は16.4%であり、平成2年値11.7%を大きく上まわっている。全国値と本標本の地域差であろうか。全国値より高いものは、お絵描き(本調査10.0%、平成2年値5.2%、以下()内値はこれにならう)、体操(16.4%:13.3%)、バレエ(5.7%:2.7%)、柔道・剣道(2.1%:0.8%)である。体操は受験のためと考えられなくはない。一方、全国値よりも低いものは、音楽(31.1%:47.2%)、水泳(30.6%:40.7%)、習字(5.0%:14.4%)であり、いずれも受験と直接関係のない習い事である。

II 子どもの心身状態と相互関係を有する要因-クロス集計による分析-

調査項目間の関連をみるためにクロス集計をし、 χ^2 検定を行った。クロス集計は、次の各領域毎に得点を加算し、平均値・SDを求め、平均値+1SDを高得点群(領域に関する状態や様子の評価が良くない、悪いことを意味する)、平均値-1SDを低得点群(状態、様子の評価が良いことを意味する)とに分け、これを領域間でクロスし、 χ^2 検定を行った。項目は、A子どもの心身状態、B乳児期の特徴、C母親の心身状態、D父親の心身状態、E父親の育児・家事参加の5項目である。そして上記の5領域とさらに次の項目とクロスし、 χ^2 検定も行なった。

「育児への心配事」、「きょうだい数」、「保育所・幼稚園通園」、「子どもの性別」、「母親の育てられ方への満足度」、「母親の育てられ方」、「母親の親友の有無」、「子どもをあずけること」、「母親の相談できる人の有無」、「母親の自己評価」、「子どもの友達の有無」、「保育器使用の有無」、「退院の遅れの有無」の14項目である。その結果を一覧表にしたものが表1である。

表1 主要な要因間のクロス集計表

	子どもの心身状態	乳児期の特徴	母親の心身状態	父親の心身状態	父親の育児参加
子どもの心身状態		1.52 5.90	0.01 42.82	0.01 14.60	2.01 5.40
乳児期の特徴	1.52 5.90		—	—	2.10 5.33
母親の心身状態	0.01 42.82	—		0.01 22.64	—
父親の心身状態	0.01 14.60	—	0.01 22.64		0.01 22.23
父親の育児参加	2.01 5.40	2.10 5.33	—	0.01 22.23	
育児への心配	0.01 20.75	—	0.62 7.50	1.58 5.82	—
きょうだい数	—	—	—	—	—
保育所・幼稚園	—	—	0.22 12.22	—	—
子どもの性別	—	—	—	3.37 6.78	—
母親自身の育てられ方への満足度	1.65 8.21	—	0.01 35.76	1.81 8.02	0.16 12.84
母親自身の育てられ方	—	—	—	0.64 12.31	—
母親の親友の有無	—	—	0.77 7.10	—	—
子どもをあずけること	—	—	0.02 16.78	—	—
母親の相談できる人	—	—	0.06 11.71	—	—
母親の自己評価	0.01 45.31	0.46 13.02	0.01 78.81	0.01 41.12	0.01 50.00
子どもの全体的評価	0.01 52.17	0.80 11.84	0.01 38.49	0.97 11.42	0.03 18.50
子どもの友達の有無	0.03 12.91	—	—	—	—
保育器使用の有無	—	—	—	—	—
退院の遅れの有無	—	—	—	—	—

注：各セルの左側は有意水準（%）、右側は χ^2 値、—はn. s.

ここでは、子どもの心身状態即ち、心身の快調さ、活発さ、いきいきしている、楽しい、気分の安定、友達との遊び、母親との気持ちの通じ合いといった、からだところ、そして情緒的、社会的にも良い状態と、相互の関係をもつ要因について述べる。

図3に示すように、相互関係をもつものは、1) 母親に関する5要因、2) 父親に関する2要因、そして、3

) 子ども自身に関する2要因であり、以下セル内の関連と比率を示し記述する。

1 母親に関する要因

母親に関しては、5要因と最も多くの相互関係を示した。第1の要因は、母親の心身状態であり、子どもの状態と母親の心身状態の双方が良いものは80.8%、双方とも状態の悪いものは90.9%にのぼり、極めて強い相互関係になることが示された。特に注目したいことは、双方不調の組み合わせの比率が高いことで、子どもの状態が悪くなく、しかも母親の状態の良いという組み合わせは10%以下であることである。このような低い比率は他の全ての要因間でも認められず、母親の心身状態がいかに重要な鍵を握っているかを示している。

第2の要因は、母親が自分自身の状態に満足しているか、不満足であるとしているかである。双方が良いものは87.2%、どちらも悪いものは48.1%であり、母

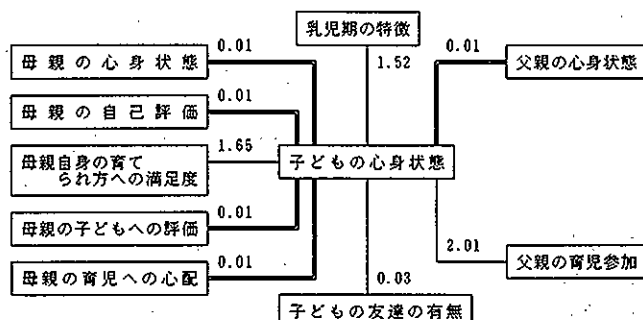


図3 子どもと心身状態と相互関係をもつ要因
(数値は有意水準の%)

親の自己評価と子どもの状態とは、重要な関係要因であるといえよう。

第3は、母親自身の育てられ方に満足か不満かの要因である。双方が良いとするものが59.3%、どちらも良くないものが31.0%であり、5つの要因の中では、最も有意水準が低い(1.65%)、しかし自らの育てられ方への自己評価が関与していることは、母子関係を考えると、世代を通じた要因があるという点で、重要なことと考えられる。

第4は、母親が自分の子どもの全体的な状態について満足しているか、不満かの要因である。双方が良しとするもの99.1%、悪いもの25.2%で、この関連が高いことは、どちらも母親の子どもへの評価であることから当然ともいえるが、しかし子どもに対して肯定的か否かは、母と子の交流にとって大切な要因であろう。

第5は、母親の育児についての心配事である。子どもの状態が良く、心配のない比率に97.3%であり、これは当然のことといえよう。しかし、子どもの状態が悪く、しかも心配があるとすると比率は24.2%と低く、母親が子どもを心配であると思うその内容は何か、相談行動を起こすものは何か、今後検討すべき課題である。

ところで、子どもの状態と最も強い相互関係を有する母親の心身状態は、これを含め最も多い10の要因と関係を有している。

即ち、①自分自身の育てられ方への評価、②母親自身の自己評価、③相談できる人がいるかどうか、④親友の有無、⑤子どもをあずけあえる人がいるかどうか、⑥母親の自分の子どもへの評価、⑦育児についての心配事、⑧保育所か幼稚園に通っているか、⑨父親の心身状態である。この中で、母親への育児支援という観点から、③、④、⑤を取り上げてみたい。

まず、③の困ったときに相談できたり、よく話しあえる友人がいて、心身状態の良いものは、95.2%、このような友人がなく、心身状態の良いものは20.9%である。④の親友のある人で、心身状態の良いものは92.3%、親友がなく、状態の悪いものは20.8%である。おそらく③と④は同じ内容を示しているであろう。母親の人間関係からの孤立は大きな問題として取り上げられるべきであろう。

⑤の身近な人たちと子どもをあずけ合うことがあるかどうか、あずけ合う人で、心身状態の良いものは82.7%、そうでなくて、状態の良いものは33.6%であり、母親同士の相互扶助的な関係も重要であろう。

⑦の母親の育児の心配事のない人で、心身状態の良い

ものは92.3%、心配事があり、状態の良いものは21.2%を示した。母親の心身状態が心配事を生み出すこともあるのかどうかの問題がある。

そして⑨の父親の心身状態とも強い相互関係を有している。父親、母親双方とも状態が良いものは73.5%であり、注目したいことは双方不調が83.3%を示していることである。このように、ネガティブな組み合わせの方の比率が高い要因は、今回の分析の中では、子どもと母親の状態が悪い組み合わせのこの2つだけである。即ち、どちらかが不調であっても、片方が調子の良い比率は11%である。父母共に心身が健康であることが、いかに重要であることを示している。そして、この父親の心身状態もまた、9つの要因と相互関係をもっているのである。

2 父親に関する要因

子どもの状態に関して相互関係を持つ父親の要因は、父親の心身状態と父親の育児参加である。まず、第1の要因の父親の心身状態の良さと、子どもの状態の良いものの組み合わせは75.0%、双方不調は73.5%である。母親との相互関係よりも比率は低いものの、父親の心身状態もまた、子どもに大きな影響をもっていることを示している。

第2の父親の育児参加の要因は、子どもの状態が良く、父親の育児参加している組み合わせは、62.1%、育児参加がなく、子どもの状態の良いものは69.2%、有意水準2.01%であった。このように、子どもの状態に直接相互関係をもつ父親の要因は、母親に比べて少ないとはいえるが、しかし父親の心身状態や育児参加の要因は母親との間に多くの相互関係を有しており、これまであげた要因以外のものを列挙すると、①母親の育児についての心配事、②子どもの性別—これは心身状態が良いと、男の子との関わりが多い傾向を示している。③母親の自分自身の育てられ方への満足度の評価、④母親がどのように育てられたと思っているか、⑤母親の自己評価、そして⑥母親の子どもへの評価である。父親の状態は、母親の要因と相互関係を有し、それが子どもの状態に関与するという間接的な効果を与えていることが考えられる。

また、父親の育児参加は、クロス表(表1)に示すように、6つの要因と相互関係をもっている。すでに記述した子どもの状態や乳児期の特徴、自分自身の心身状態と、そして母親の自分自身の育てられ方の満足度の評価、母親の自己評価、そして母親の子どもへの評価とも相互関係を有している。従って、父親の育児参加は母親に、そして母親の子どもも評価とも関係を有していることが示された。

3 子ども自身に関する要因

現在の子どもの状態に相互関係をもつ子ども自身に関する要因は2つあって、①乳児期の特徴と、②友達の有無である。

第1の要因である乳児期の特徴は、睡眠の状態、泣きと、泣きのなだめやすさ、哺乳、おとなしいか、手がかかるかである。いわば、乳児の気質と現在とらえられているものである。双方良いものが62.5%、悪い組み合わせが64.7%であり、比率はそう高いとはいえない（有意水準1.52%）。しかし、乳児期のこれらの特徴は素質的な傾向か、母親の対応から生じるものか、あるいは、その相互作用であるのか、いずれにしても幼児期に影響を及ぼさないとはいえないとの知見であろう。

第2の要因は、仲良しの友達の有無であり、友達がいて状態の良いものは99.1%、友達がなく、状態の良いものは14.6%であった。子どもの状態の中に、友達と上手に遊べない（13.3%）項目があり、この影響も考えねばならないが、友達の存在も大きいものといえよう。しかし、ネガティブな組み合わせは14.6%であって、幼児期にあっては、育児環境、特に親との関係がやはり重要なのであろう。

なお、子どもの心身状態と有意な相互関係をもたない要因は「きょうだい数」「保育所幼稚園か」「性別」「母親の育てられ方のタイプ」「母親の親友の有無」「子どもをあずけ合うこと」「母親の相談相手の有無」「保育器使用の有無」「退院の遅れ」の9要因であった。

III. 考 察

子どもの心身の状態は、育児環境の、それもいかなる要因と相互的な関連を有するのか、乳幼児健診における保健指導や、子どもの相談を行う上で有用な知見を得る目的で本研究は行われた。

以下、研究方法を含め考察を行い、本研究で得られた知見を吟味すると共に、今後の研究の課題を検討したい。まず、研究対象を幼児期後半としたことは、目的に述べた2つの理由により、この点については妥当であると考えられるが、乳児期の特徴と関連のある項目、要因は少なく、また母親の育児不安とその影響を考慮すると、乳児を対象とした研究も必要であると考えられた。

次に、標本が806名であり、調査地域も都市部が中心で、この点でただちに一般化することは危険であろう。従って、今回得られた知見は、傾向ないし、手掛かりを示したに止めることが妥当である。

作成した調査項目について、 χ^2 検定によるクロス集計の結果をみると、各項目の要因間で有意な相互関係を

多く示し、ある程度本研究の目的にかなった項目といえる。

以上の研究方法上の考察をふまえた上で、得られた知見とそれに基づく今後の課題について検討を加えたい。

1 単純集計の知見

①子どもの心身状態の中で、疲れている子どもが15.5%いる。疲れの原因は不明であるが、習い事の比率をみると、いかに子どもたちが多忙であるかが推測できる。

子どもは日常生活の中で多種多様な生活体験をし、加えて自発的で主体性のある活動を通してこそ、心身ともに発達してゆくものであることを忘れてはならないであろう。これらの限定された、しかも自発性、主体性を欠いた活動に殆どの時間を奪われてゆくことの後の発達への影響も考えておかねばならない。

友達と上手に遊べない、あるいは仲の良い友達がいないといったことは、人との協調性を中心に、良好な対人関係を保ち発展させ、その中で、社会生活に必要な行動や態度、感情を身につけてゆく、社会性の発達の問題を含んでいる。知的領域の発達のみを目を奪われることなく、自分を生かしながら社会に適応してゆけることが、育児の大きな目的であろう。こころとからだに全体的な不調な子が数%みられること、そして、これらの子どもが情緒、行動的問題をまだ生じさせていないとしても、予備軍である可能性はある。

②乳児期の特徴の中で、なだめにくい泣きをはじめとする育てにくい子（10数%）は、Irritable Babyといわれ、母親にネガティブな情緒を生起させ、母子相互作用の質的側面に影響を与える。児の特徴の理解と対応の仕方、そして母親への支持、支援が必要であろう。人見知り、後追いや極端に強いものは、分離不安の問題を中心に母子関係の中核である安全性の機能が働いているかどうか、前述の社会性の発達とも関連する重要な問題であり、健診等で取り上げ、相談にのりたいものである。

③子どもの心配な気になる行動について、特に爪かみ、チェックが昭和55年、平成2年幼児健康度調査値より高く、しかも経年的に上昇しており、子どもがストレスフルな状況に年々おかれてきていることが推測される。

不登校児の幼児期をみると、幼稚園等に行きたがらないとのエピソードをもつ子が多い。極端なこだわり、場面かん黙も前述の調査値よりも高い。これら情緒、行動的問題の発生と関与する要因、ないしは発生を予防する要因に関する調査研究と、事例研究を行うことが課題である。

④母親の心身状態について。心身の健康さを全体的に評価すれば80%強の母親は健康である。しかし、個々の

項目をみてゆくと、疲れ気味で、ゆとり、余裕のなさが50%前後の母親にみられている。余裕のなさ、焦りはここの健康の大敵であり、また育児への影響も十分考えられる。これに関連してか、育児を楽しみと思えない母親が増えている。この理由や子どもへの影響についての検討が必要である。心身不調の母親も10数%はおり、乳幼児健診に母親健診という視点を持ち、母親への援助を行うことが重要であろう。

⑤父親の心身状態に関して。母親より疲れている(母47.1%、父55.6%)ことに注目され、全体的な健康さ、心身の快調さも母親よりも低率である。障害児の父親研究の知見¹¹⁾によると、その父親の心身状態の悪さは、子どもと妻の心身状態が悪いこと、相談相手がいないこと、そして年齢が高いことであるとしている。後述するように、父親も育児において重要な役割を有しており、育児、家事参加も必要ではあるが、しかし父親自身の健康にも関心を払い、その援助を考えるべきであろう。この育児、家事への参加や子どもとの関わりは、その比率の高さだけでなく、その内容と機能がより重要であろう。

⑥夫婦関係、家庭の状態について。夫婦間で気持ちが通じあっているかどうか、どちらともいえないの回答が23.9%あることに注目される。家族との会話が少ない14.7%、家族としてのまとまりがない11.3%を含め、夫婦関係や、家庭の雰囲気は、子どもへも、そして父親が父親としての役割を果たすことにも大きな影響をもっている。また父親が家庭生活で重要な決定をすることと、母親の良好な養育態度とは有意な関係があるとの知見¹²⁾もあり、母親に決定権があるとする35.6%の値の評価も検討すべき問題であろう。

⑦母親の育てられ方、友人の有無、自己及び子どもへの評価について。まず育てられ方への満足を取りあげたい。自分の親とのありようが、親となったとき、子どもとの関係に影響を与える、あるいは再現されることは臨床知見が示すところであるし、極端なケースでは、小児虐待があげられる。

そうだとすれば、現在の親子関係を良くしてゆくことが、次代、次々代の親子関係にとって重要であることはいうまでもないであろう。

母親に親友や、信頼できる人がいるかどうか、孤立していないかどうかは、育児支援を考える上で鍵となることである。後述するが、これらは母親の心身状態と有意な関係をもっており、また特に危機状態の克服とも関連している。

母親の自己及び子ども評価は、相互に影響を与え合う可能性がある。即ち、自己をポジティブに評価する人は

、他者をもそのように評価する傾向があって、そのような母親は、子どももポジティブに評価することができる。自分自身の時間をもてないことが不満であるとの調査結果もあり、現在では、母親は母親としてあることだけでなく、女性として、人間として、働くことを含めて社会的存在としてもありたいとの傾向にあることを認識する必要があると考えられる。

2 子どもの心身状態と相互関係を有する要因

図2の要因のシェマが示すように、子どもの心身の状態の良さは、直接には9要因が、そしてその各要因が、他の要因とも関連を有しており、まさに子どもは大きな容器の中で育っていることを示している。

以下主要な要因について順次考察を加えたい。

①母親に関する要因のうち、あるいは全ての要因のうち、最も強い相互性を示した要因が母親の心身状態であった。従って、子どもの心身の健康とその増進をはかる小児保健活動や子どもの相談の大きな柱として母親への支援、援助が必要、不可欠であることを指摘したい。母親への保健指導というと、ともすれば一方的な指導になり、加えて欠点、間違いを指摘し、母親を悪役に仕立てあげがちであった。本研究で得られた母親の心身状態と相互関係を有する要因を支援、援助の手掛かりとすることができよう。援助のための相談過程の中で、自分の親との関係をふりかえってもらったり、自分の状態を正當に評価できるように、自己認知の変化をもたらすことも必要であろう。この変化の中で、子どもへの評価、認知の変容を期待することができる。相談でき、信頼できる人がいない場合、まさに相談者がその役割を果たすべきであろう。母親の仲間づくりへの機会を作るという意味では、最近保健所、市町村の保健センター等で行われてきている母と子の遊びのグループは有効な手段と考えられる。いずれにしても、母親を孤立させないこと、子どもと同様母親の社会性の問題にも注意を払うべきであろう。

母親の育児への心配事も心身状態と関連をもっている。母親の状態の悪さが、子ども自身はそう心配な状態ではないにもかかわらず、心配させてしまうのか否か等、検討すべきであろう。育児不安と一般にいわれているものも、曖昧なまま使われているようで、操作的にしてもきちんと定義し、これを生み出す要因と、その影響についての研究が必要である。

父親の心身状態も有意な関連を多くもち、すでに述べた母親への援助と同様、父親も小児保健活動の中に組込むべきものと考えられる。

筆者らは、父親の育児における役割を明らかにしなが

ら¹³⁾、保健指導等への父親の参加と、その援助の方法について検討中である。

②子どもの心身状態と関連する父親に関する要因は、ここでも父親の心身状態が、母親のそれに次いで強い相互関係をもっている。従って、この知見は、父親は母親と同様、子どもの心身の健康や発達に重要な機能を果たしているということのひとつの裏づけとなるものである。そして、父親の心身状態もまた、母親に関する多くの要因と相互関係を有しているのであり、父親の問題は母親の問題でもあり、その逆もまた真である。単純集計での夫婦間の気持ちの通じ合い、家族の会話、家族としてのまとまりといった夫婦関係を中心とした家族についての知見を示し、その雰囲気的重要性を指摘したい。

子どもの情緒、行動の問題についての相談の中で、夫婦関係の問題が背景にあることが少なくなく、母親面接のみでなく、父母同席面接が必要なケースがあり、しかも効果的である。また、父親の育児参加も子どもの状態と相互関係にあるが、父親が育児に参加し、その役割を果たすための6つの要因が示された。

ただ単に、父親も育児に参加すべきであるとのスローガンをかかげるだけでは参加そのものも、そこでの役割を十分に果たすことも期待できない。少なくともクロス表に示された父親の心身状態や、母親の自己及び子どもへの評価等を手がかりに、父親が育児における役割を果たせるよう配慮し、援助することが必要であろう。

③ 子ども自身に関する要因は、乳児期の特徴と友達の有無の2つが見出されたが、子どもの心身状態への相互関係を有する要因は、少ないことが示された。このことは、子どもの状態がいかに、本研究でいう育児環境に依拠しているかを端的に示した知見といえよう。いいかえれば、子どもが相互作用をもつその環境-要因-が、いかに重要であるかということにほかならない。

乳児期の特徴と友達の有無に関しては、すでに考察を加えたので、ここでは触れない。

④子どもの心身状態と有意な関連を示さない要因があることが注目される。きょうだい数や性別は関連しないし、保育所幼稚園かも、おそらく母親就労の直接的な影響はないことを示しているのであろう。

母親の親友や困った時の相談相手、子どもをあずけ合うこと等の母親支援にかかわるものは、子どもに直接ではなく、母親の心身状態を通して間接的な影響をもつものと考えられる。

最後に、本研究では、子どもの心身状態の良さと相互関係をもつ要因について、ある程度明らかにし、乳幼児健診における保健指導や子どもの相談へのつながり、ポ

イントを示しえたと思う。しかし、もう一步踏み込んで、たとえば、最も強い相互関係にある母親の心身状態の要因でも、そのクロスセルをみると、母親の状態が悪くても、子どもの状態が良いものが7.7%認められ、ここには別の何らかの要因が働いているものと考えられる。

人は生身であり、全て良しとはいかないことは当然のこと、だからこそ、ある状態が悪くとも、それに代替する、あるいは、補完する要因をみだし、援助の手がかりとすることが重要であろう。このことに対し、本研究は、応えられず、今後の大きな研究課題である。

IV 結 語

子どもの心身の健康は、育児環境のいかなる要因と相互性を有するのかを見だし、乳幼児健診での保健指導や子どもの相談の実際に寄与することを目的に、本研究は行われた。その結果得られた知見は次のようである。

子どもの心身状態と相互の関係をもつ要因は、①母親に関する5要因即ち「母親の心身状態」、「母親の自己評価」、「母親自身の育てられ方への満足度」、「母親の子どもへの評価」、「母親の育児への心配事」であった。②父親に関しては2要因、即ち「父親の心身状態」、「父親の育児参加」である。③子ども自身に関しては「乳児期の特徴」及び「友達の有無」であった。そして、これらの要因の中で、子どもの心身状態と最も強い相互の関連をもつ要因は「母親の心身状態」であり、しかもこの要因自体が父親の心身状態や自己評価等、最も多い9要因と相互関係を有していた。従って、子どもの心身の健康への援助活動の中に母親への支援・援助を組み込むことが必要であること、乳幼児健診に、母親健診という視点を持ち、援助を行うことの重要性和その実際のポイントを指摘した。

また、母親の心身状態に次いで子どもの心身状態と強い相互関係をもつ要因は「父親の心身状態」であった。従って、父親もまた母親と同様に子どもの心身の健康にとって重要な機能を有していることを指摘した。

そして、その父親の心身状態は、母親の心身状態をはじめ多くの要因と相互関係を有し、父親が育児において、その役割を十分果たすためにも、これらの要因を手掛かりに父親自身への配慮や援助が必要であるとした。

子ども自身に関連する要因は「乳児期の特徴」と「友達の有無」のみであり、子どもの心身状態がいかに育児環境に依拠しているのか、言い換えれば子どもが相互作用をもつその環境がいかに重要であるかが、改めて確認された。

<謝 辞>

本研究をすすめるにあたり、ご協力いただいた各保育所、幼稚園の先生方、保護者の方々に深く感謝の意を表します。

<参考文献>

- 1) Belsky, J., "The determinants of parenting: A process model." Child Development, 55(1), 83-96, 1984
- 2) 『乳児期の母子関係と心の健康—全国調査から—』厚生省心身障害研究「母子相互作用研究」(小林登主任研究者) 昭和60年度研究報告書
- 3) 『昭和55年健康度調査報告』小児保健研究, 40-4, 319-338, 1981
- 4) 『平成2年健康度調査報告』小児保健研究, 50-6, 691-699, 1991
- 5) 『三歳児健診における心理社会的チェック指標の策定に関する研究』小児保健研究, 44-5, 611-614, 1986
- 6) 『乳児期後半(4・5・6歳児)の健診の意義に関する心理学的研究』厚生省心身障害研究: 乳幼児健康診査システムの充実と改善に関する研究(平山宗宏主任研究者)、昭和63年度研究報告書
- 7) 『育児における父親の役割に関する研究』厚生省心身障害研究: 高齢化社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究(平山宗宏主任研究者) 平成3年度研究報告書
- 8) Thomas, A. & Chess, S., "The dynamics of psychological development." N.Y. Brunner / Masel, 1980 (林 雅次・他訳『子供の気質と心理的発達』星和書店, 1981)
- 9) 川井 尚、庄司順一、恒次欽也「妊娠・産褥期の精神的問題のスクリーニングに関する研究」乳児発達研究, 12, 1-27, 1992
- 10) 森田英雄・他「母親が育児を楽しむための父親の役割に関する研究」(上記文献7の分担研究)
- 11) 恒次欽也・他「障害児をもつ子どもの父親の育児意識—その3—」(上記文献7の分担研究)
- 12) 大藪 泰「父親行動と母親の養育態度に関する研究」(上記文献7の分担研究)
- 13) 川井 尚「育児における父親の役割」小児保健研究, 51-6, 671-680, 1992

付表1-1 子どもの心身状態

(実数と%)

	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不 明
活発である	540 67.0	212 26.3	48 6.0	4 0.5	2 0.2
生き生きしている	524 65.0	259 32.1	18 2.2	1 0.1	4 0.5
疲れている	26 3.2	98 12.2	217 27.0	454 56.4	10 1.2
楽しそうである	583 72.3	193 23.9	21 2.6	2 0.2	7 0.9
怒りやすい	80 9.9	316 39.3	210 26.1	191 23.7	8 1.0
気分が変わりやすい	53 6.6	237 29.4	248 30.8	259 32.1	9 1.1
喜怒哀楽が激しい	91 11.3	207 25.7	264 32.8	231 28.7	13 1.6
落ち着きがない	75 9.3	249 30.9	214 26.6	260 32.3	7 0.9
友達と上手に遊べない	20 2.5	87 10.8	220 27.3	473 58.8	5 0.6
母親と気持ちが通じ合わない	12 1.5	58 7.2	182 22.6	543 67.5	10 1.2
こころの状態は良好だ	534 66.3	208 25.8	38 4.7	19 2.4	7 0.9
からだの状態は良好だ	568 70.5	177 22.0	34 4.2	19 2.4	8 1.0

付表1-2 乳児期の特徴

A 生後半年くらいまで

(実数と%)

睡眠	すごくよく眠った	231	28.7
	ふつうだった	448	55.7
	あまり眠らない方だった	126	15.7
泣き	あまり泣かなかった	152	18.9
	ふつうだった	439	54.5
	よく泣いたが、なだめやすかった	130	16.1
	よく泣き、しかもなだめにくかった	84	10.4
哺乳状態	よく飲んだ	422	52.4
	ふつうだった	298	37.0
	飲みがよくなかった	85	10.6
乳児期の印象	おとなしく、手がかからなかった	235	29.3
	ふつう	449	55.9
	とても手がかかり、大変だった	119	14.8

B 1歳の頃

(実数と%)

始歩	はやかった	280	34.8
	ふつうだった	426	53.0
	おそかった	98	12.2
始語	はやかった	271	33.8
	ふつうだった	415	51.8
	おそかった	115	14.4
人見知り	あまりしなかった	371	46.1
	ふつうだった	302	37.5
	強かった	132	16.4
後追い	あまりしなかった	159	19.9
	ふつうだった	492	61.4
	強かった	150	18.7

C 2～3歳の頃

(実数と%)

反抗期	あまりなかった	246	30.6
	ふつうだった	482	60.0
	強かった	75	9.3

付表1-3 妊娠・周産期

1) 妊娠に気づいたとき

(実数と%)

とてもうれしかった	489	60.7
うれしいけれど不安だった	267	33.1
とても不安だった	43	5.3
不明	7	0.9

2) 分娩

(実数と%)

自然分娩	696	86.4
帝王切開	57	7.1
骨盤位	16	2.0
その他	32	4.0
不明	5	0.6

3) 保育器の使用

(実数と%)

使用しなかった	712	88.3
使用した	88	10.9
不明	6	0.7

4) 退院

(実数と%)

予定どおりに退院	698	86.6
退院は遅れた	105	13.0
不明	3	0.4

付表1-4 子どもの気になる行動(複数回答) (実数と%)

指しゃぶり	91	11.3	発音不明瞭	40	5.0
爪かみ	70	8.7	吃音	7	0.9
チック	13	1.6	極端な人見知り・内気	18	2.2
昼間遺尿	21	2.6	友だちと遊べない	18	2.2
夜尿	40	5.0	登園しぶり	17	2.1
頻尿	31	3.8	ひどくこわがる	35	4.3
遺糞	7	0.9	場面緘黙	8	1.0
偏食	52	6.5	おちつきがない・集中しない	73	9.1
小食	120	14.9	不器用	32	4.0
夜驚	25	3.1	ひどくこだわる	44	5.5
			その他	65	8.1

付表1-5 父母の心身状態 (実数と%)

	母 親					父 親						
	は	い	いい	え	不 明	は	い	いい	え	不 明		
健康である	731	90.8	68	8.4	6	0.7	693	86.0	53	6.6	60	7.4
疲れている	384	47.6	413	51.2	9	1.1	448	55.6	296	36.7	62	7.7
意欲的である	537	66.6	253	31.4	16	2.0	560	69.5	179	22.2	67	8.3
心配性である	403	50.0	394	48.9	9	1.1	207	25.7	538	66.7	61	7.6
いらいらしている	311	38.6	482	59.8	13	1.6	141	17.5	603	74.8	62	7.7
楽天的である	576	71.5	222	27.5	8	1.0	512	63.5	226	28.0	68	8.4
几帳面である	319	39.6	469	58.2	18	2.2	335	41.6	402	49.9	69	8.6
食欲がない	37	4.6	763	94.7	6	0.7	41	5.1	706	87.6	59	7.3
熟睡しない	144	17.9	653	81.0	9	1.1	85	10.5	658	81.6	63	7.8
ゆとりがない	340	42.2	457	56.7	9	1.1	227	28.2	517	64.1	62	7.7
家事（仕事）におわれている	446	55.3	354	43.9	6	0.7	428	53.1	316	39.2	62	7.7
育児を楽しみと思える	552	68.5	232	28.8	22	2.7	477	59.2	257	31.9	72	8.9
からだの状態は良好	690	85.6	111	13.8	5	0.6	651	80.8	94	11.7	61	7.6
気持ちの状態は良好	664	82.4	135	16.7	7	0.9	655	81.3	87	10.8	64	7.9

付表1-6 父親の育児・家事への参加 (実数と%)

	子ども とのかわり	育児参加	家事参加
積極的である	226 30.2	151 20.2	73 9.8
まあまあ積極的である	343 45.9	337 45.1	233 31.2
あまり積極的でない	145 19.4	202 27.0	231 30.9
消極的である	34 4.5	58 7.8	210 28.1
不明・記入なし	58 —	58 —	59 —

注: %は不明・記入なしを除いて求めたものである

付表1-7 父親の育児への関心 (実数と%)

強い関心をもっている	171	22.9
まあまあ関心をもっている	450	60.2
あまり関心がない	110	14.7
関心がない	16	2.1
不明・記入なし	59	—

付表1-8 父親の育児・家事への参加に対する母親の満足度 (実数と%)

	育児参加		家事参加	
十分満足している	151	20.2	107	14.3
まあまあ満足している	377	50.4	322	43.2
あまり満足していない	163	21.8	206	27.6
まったく満足していない	57	7.6	111	14.9
不明・記入なし	58	—	60	—

付表1-9 父親の育児・家事参加への母親の期待 (実数と%)

もっと参加してほしい	368	49.4
今のままでよい	373	50.1
もっと私(妻)にまかせてほしい	4	0.5
不明・記入なし	61	—

付表1-10 夫婦間の気持ちの通じ合い (実数と%)

まあまあ気持ちが通じている	533	71.8
気持ちが通じていない	32	4.3
どちらともいえない	177	23.9
不明・記入なし	64	—

付表1-11 普段の家庭生活上の決定権 (実数と%)

母親自身	269	35.6
父親	432	57.1
子ども	7	0.9
祖父母	24	3.2
その他	24	3.2
不明・記入なし	50	—

付表1-12 家族の会話 (実数と%)

ある方だ	648	85.3
ない方だ	112	14.7
不明・記入なし	46	—

付表1-13 家族のまとまり (実数と%)

まとまりがある方だ	670	88.7
あまりまとまっていない	85	11.3
不明・記入なし	51	—

付表1-14 母親の育てられ方への満足度 (実数と%)

どちらかという満足している	445	56.8
どちらかという不満である	145	18.5
何ともいえない	194	24.7
不明・記入なし	22	—

付表1-15 母親の育てられ方のタイプ (実数と%)

どちらかというやさしく育てられた	244	31.4
どちらかというときびしく育てられた	278	35.8
どちらかという放任主義だった	209	26.9
その他	45	5.8
不明・記入なし	30	—

付表1-16 母親の友人関係

1) 親友の有無 (実数と%)

いる	692	88.3
いない	92	11.7
不明・記入なし	22	—

2) 子どものあずけ合い (実数と%)

よくある	183	23.3
たまにある	389	49.5
ない	214	27.2
不明・記入なし	20	—

付表1-17 母親の自己評価 (実数と%)

満足している	119	14.8
まあまあ満足している	495	61.7
やや不満足である	150	18.7
不満足である	38	4.7

3) 困ったときの相談相手 (実数と%)

いる	714	91.1
いない	70	8.9
不明・記入なし	22	—

付表1-18 母親の子どもに対する評価 (実数と%)

満足している	213	26.6
まあまあ満足している	528	65.8
やや不満足である	58	7.2
不満足である	3	0.4

付表1-19 子どもの友人の有無 (実数と%)

いる	759	94.9
いない	41	5.1

付表1-20 子どもの習い事 (複数回答) (実数と%)

勉強の塾	132	16.4	遊びの教室	19	2.4
音楽	251	31.1	お絵かき	81	10.0
そろばん	2	0.2	体操	132	16.4
バレエ	46	5.7	水泳	247	30.6
柔道・剣道	17	2.1	野球・サッカー	6	0.7
習字	40	5.0	その他	50	6.2
やっていない	247	30.6			

付表1-21 育児への心配ごと (実数と%)

あり	700	87.0
なし	105	13.0